

研究ノート

## 温泉地における長期滞在の問題点と課題

### The Problems and Theme of Long-term Stay in Hot spring resort

浦 達 雄\*

URA Tatsuo

This research note presents the result of the problems and future tasks of long-term stay in hot spring resort by interviewing with stakeholders. The outcome could be classified as follows :

① The pattern of stay (Active or not) ② Improvement of system of stay ③ Improvement of excursion as a side trip from the place of stay ④ Short-term stay at hot spring resort ⑤ Requirement of coordinator at hot spring resort ⑥ Requirement of environmental improvement ⑦ Enrichment of accommodations ⑧ Healthy life for senior citizen

In 21<sup>st</sup> century, low birth rate and increasing aging population has been occurred. Therefore the problems of health and nursing for senior citizen is increasing. The long term stay at hot spring resort might be a better solution to their health preservation.

キーワード：温泉地 (Hot spring resort), 長期滞在 (Long-term Stay), 問題点 (Problems), 課題 (Theme)

#### 1. はじめに

##### (1) 研究の背景

温泉地は、元々湯治場（療養温泉地）として機能し、高度経済成長期で観光温泉地に方向転換をしたところが多い。その究極は、熱海・伊東・別府と言った温泉観光都市の登場となった（浦 2006）。その結果、古くから湯治場として機能していた温泉地の大半が廃れ、温泉地の方向性が見えなくなってきた。そうした中で、安定経済成長期以降、秘湯系・癒し系の温泉地が脚光を集め、湯治客とは違う、いわゆる観光客が入り込むことになった（服部 2012）。

ところで、近年、歓楽化・観光化した温泉地に対して、元々の温泉地としての機能を見直す気運が出てきている。そうした中で、東鳴子（宮城県）・温泉津（鳥根県）・湯原（岡山県）などで、新たな取り組みが試みられるようになった（2009 布山）。その取り組みは、病

院とのタイアップ、新しいタイプの宿泊施設の整備などである。温泉津温泉では、一部でリーズナブルなゲストハウスを整備し、湯治・保養に対応する場の提供を行っている。

本来、温泉地の機能は湯治機能であり、今風で言えば、長期滞在（ロングステイ）の顧客が多かった。高度経済成長期で、1泊宴会・観光型の温泉地が流行し、いまから思えば、その方向性は、温泉の機能から言えば、誤りだったかも知れない。

そこで、今回、温泉地における長期滞在について、研究テーマを定め、調査を進めた。持続可能な温泉地の方向性を示す場合は、温泉地としての本来のあり方、方向性を再構築することは意義深いと考える。

##### (2) 研究の目的

本研究は、温泉地における長期滞在について、その実態を明らかにすることが目的である。その際、アンケート用紙を用いて聞き取り調査を実施した。アンケートの

\*大阪観光大学観光学部

対象は、大学の研究者・在野の研究者・温泉ライター（含む温泉マニア）となる。今回は、長期滞在をすすめる際の問題点と課題についてテーマを絞り、その他のアンケート、つまり、長期滞在者の動向などの報告は別の機会に譲りたい。

### (3) 研究の方法

研究の方法は、アンケート形式の聞き取り調査である。聞き取り調査は、日本温泉地域学会の研究発表会の場（2014年11月9日と10日、2015年5月17日と18日）で実施した。その場でアンケート調査用紙を手渡し、その場で記入した上で、聞き取り調査をする手法である。その後メールでやり取りをして、調査の完了となった。調査対象者は10人で、その内訳は、大学の研究者4人・在野の研究者2人・温泉ライター（含む温泉マニア）4人となる。

調査項目は、次の通りである。①最近の宿泊客（観光客）の動向、②長期滞在者の動向、③長期滞在をすすめる際の問題点と課題、④その他、となる。旅館経営者・行政関係者・観光関係者にも対応できるように、簡潔なものにした。ここでは、③の問題点と課題を取り上げて、論を進めたいと思う。

今回の聞き取り調査は、旅館経営者・行政関係者・観光関係者に対しても実施したが、その調査結果は別の機会に報告するものとする。

### (4) 従来研究成果

観光地理学の立場で、温泉地に関する研究は実に多い。しかし、長期滞在の研究となると、その数は少ない。日本を代表する温泉に関する学会の1つである日本温泉地域学会の研究誌「温泉地域研究」を見ると、次のような成果がある。

結果的には、長期滞在をテーマとする論考は存在しなかった。しかし、保養温泉地、ヘルスツーリズム、湯治場などをキーワードとする論文数は多い。日本温泉地域学会の口頭発表では、以下がある。

井上晶子（2014）：「温泉地における滞在に関する研究（1）－『滞在』についての一考察－」

内田彩（2014）：「温泉地における滞在に関する研究（2）－宿泊施設による魅力ある滞在にむけての試み－」

なお、投稿中の論文として、以下がある。

浦達雄（投稿中）「温泉地における長期滞在について」観光研究論集（大阪観光大学観光学研究所）

井上晶子・内田彩（投稿中）「温泉地の滞在に関する

イメージを巡って」日本国際観光学会論文集

## 2. 長期滞在をすすめる際の問題点と課題

ここでは、聞き取り調査の回答（一部筆者修正）をまず掲載したい。

### (1) A（在野の研究者）

以下の問題点と課題、提言を行った。

#### ①問題点1

「湯治に行く1週間以上の長期の休暇など取れない」というのが、現代日本の大半のサラリーマンの実情である。農家の場合は、長期の休み（田植えの後約1か月、稲刈りの後半月～1か月ぐらい）が取れる方が多く、その休み期間を利用して湯治に来る客が多かった。

#### ②問題点2

1週間以内でも3日以上宿泊・滞在も「長期滞在」とするならば、一般のサラリーマンでも休み期間（夏休み・冬休み・春休み・ゴールデンウィークなど）に行ける。しかし、休み期間は湯治客を受け入れない旅館もある。とはいえ、湯治場の伝統を維持している温泉地の旅館では、湯治客を受け入れない期間などは設けていない。

#### ③問題点3

「旅行をする目的の一つは、炊事から解放されて、上げ膳・据え膳で食事を楽しむこと。温泉旅行も同じ。」という主婦は多い。長期滞りの湯治においても、この主婦の本音を通す者が多く、夫婦客の湯治の多くは食事付きとなる。一人の女性湯治客の場合も、毎回自炊する人の割合は多くないと思う。一人の男性湯治客の場合、毎回自炊することはできない、あるいは不得手という客が多いと思う。長期湯治には、自炊が経済的でよいと思うが、現代は少数派になっているようである。

#### ④問題点4

湯治客の大半は、治療・療養（特に術後の療養が多い）を目的とする。

#### ⑤問題点5

長期滞りには当然資金が必要である。椿温泉の国民宿舎ひらみの館主の話では、かつては貯金の利息を資金として湯治に来る客が多かった。しかし、「ゼロ金利」政策（1999年以降）がとられてからは、そのような客がめっきり減った。かつて椿温泉では大半の旅館が湯治客を主としていたので、湯治客の減少により、多くの旅館が廃業したが、この遠因は「ゼロ金利」政策にある、

とのことであった。

アベノミクスの政策のもと、日経平均株価が3年前より2倍以上になった。(日経平均株価が2012年6月の8,440円~9,006円から、2015年6月現在は2万円台に乗っている。)この株価の上昇で得た資産から湯治の資金を出す者が今後増えるのではないかと予想している。

#### ⑥提案

わが国においても、ドイツのような「温泉健康保養地」が整備できないであろうか。また、その保養地において長期滞在者の温泉療法に対して医療保険が認められるようになれば、長期滞在療養者は飛躍的に増加すると予想される。「温泉健康保養地」(仮称)の整備と、その保養地での長期滞在者の温泉療法に対する医療保険認定施策の実現のためには、何よりも国家予算の充当が必要である。予算面から、全国の数多い温泉地から少数の保養地を厳選してスタートすることが実現の近道であろうと思う。

現行の「国民保養温泉地」は数が多すぎ、国が名称を付けただけで実質的な予算措置をほとんどしていない有名無実の施策である。これとは別に、新たに「保養地での長期滞在者の温泉療法に対する医療保険認定」施策の実現を目的に、十分に予算をつける地域を少しずつ建設していく方策をとるべきである。

#### (2) B (大学の研究者)

いまだに社会的余裕が無い。仕事を休んで英気を養う。1週間休むとシンドイ。勤め人は社会構造が問題。制度的に実施は難しい。遊んでいると、仕事が遅れる。シルバー世代でも、教育・生活にお金がかかり、難しいと思う。

#### (3) C (大学の研究者)

①食事形態のバラエティさ。食事内容はもちろんであるが、農村地帯が周辺にある場合は地産地消の食材にする共に自分たちで収穫し、料理することなどが可能である。都市に近い場合は市場を活用することも良い。

②近場に良好な自然景観または都市景観を有することによる散策・観察が可能であること。(ゆったりと温泉を楽しむことも必要だが)

③風呂場のバラエティさ。泉質は温泉地の特徴もあるので、風呂の形態の豊富さが必要である。(他の旅館との協力も含め)

④長期滞在の場合は、温泉でのんびりと過ごし、リフレ

ッシュすることも大切であるが、客の参加型体験が可能であることの必要性を感じる。例としてヨーロッパの農村体験や日本の見学・体験学習との組み合わせなど。

#### (4) D (温泉ライター)

長期滞在をする観光客は「活動的に過ごす」と「何もしないで過ごす」の2つに大別できる。

##### ①活動的に過ごす

活動的に過ごす場合には、様々なアクティビティを体験しながら過ごす層(若年層やファミリー層など)と、一つの活動を継続的に行う層(湯治・野鳥観察・写真撮影など)に分かれる。アクティビティを体験しながら過ごすには、ある程度の都市機能や観光施設が必須のため、大規模な温泉地か、大都市に付随した温泉地に限られる。

また、小規模な温泉地でも、周囲の都市や温泉地と協力すれば長期滞在も可能だと考えられるが、距離・交通手段・ベースとなる温泉地との関連など諸問題をクリアしなければ、一つのディスティネーションとして括することは難しいと考える。

##### ②何もしないで過ごす

何もしないで過ごす場合は、本当に何にもしないで過ごせるかと言えばそうではない。一例として、モルディブの1島1リゾートのコテージで長期滞在するゲストは何をして過ごしているかと言うと、ビーチ・レストラン・客室・バー・星空観賞・そしてダイビングなどのアクティビティを体験しながら長期滞在を行っている。これを温泉地に転換してみると、入浴・郷土料理・客室・居酒屋・星空観賞・ウォーキングなどのアクティビティがあれば長期滞在も可能と考える。

ところで、アクティビティだが、街中ウォーキングツアーやトレッキング、朝市・健康体操・美術館や資料館・図書館など現在ある施設や可能な限りのボランティアガイドなどで十分実現可能な事ばかりではあるが、観光客に上手く訴求できていない観光地が多い。

核となる宿泊先の長期滞在プランなど、様々な客層に対応できる料金プランの作成はもちろんのこと、この温泉地ではどのように長期滞在を楽しめるかの提案力が今後の課題であると言える。

##### ③その他

やはり別府が一番充実していると思う。膨大な源泉数・温泉道・八湯ウォーク・貸間旅館・地獄めぐり・居酒屋・亀の井バスなど何日いても何年いても飽きることが無い。しかしながら、別府規模の温泉地は日本各地に無

いので、現在ある資源の中でどのように魅力を訴求できるかが課題となろう。

個人で温泉巡りをしているが、魅力を発揮できていない残念な温泉地が散見される。現状維持で良い温泉や後継者不足から発展を望んでいない温泉地など様々な事情がある。ゲスト側もホスト側もそれぞれの事情を理解しながら現状を楽しむという広い心で接して欲しい。

#### (5) E (大学の研究者)

湯治のための長期滞在をすすめる際、その対象となる人は経済的・時間的にかなり余裕のある恵まれた人に限定される。しかしながら、身体的・精神的に長期滞在を心から望む人は少なくないと考ええる。例えば、アトピー性皮膚炎・糖尿病・精神疾患、その他の現代医学で症状改善が見られない疾患に悩む方々など、温泉の効果に期待を持ちながらも、長期滞在が困難な人は多いと考えられる。従って、このような方々に対して湯治場での長期滞在が可能な地域・環境・社会制度を整備していくことが肝要であると考ええる。

そもそも、現在、日本の湯治場で長期滞在できるところ自体が最早少なく、とりわけ名湯といわれる有名な温泉地で病を癒すために長期滞在できるところは、ほとんど無いと言っても、過言ではない。今後、温泉地が長期滞在型に環境整備を行うためには、社会的な休暇利用や保険制度の整備を進めていくことが課題であると考ええる。同時に、これらを進めていくには、温泉の有効性をさらに明確にすることが必要であり、医学的・社会的に温泉の効果が認知されることで、より多くの温泉地において長期滞在型の道を進めることができるのではないかと考える。特に、ストレス社会にある現代においては、未病の段階にある人も多く、病に至る前に心身を癒すための長期滞在型の保養が有効であると考えられるゆえに、ドイツのクナイプ自然療法等を手本とした温泉地利用を検討していくことも必要ではなからうかと考える。

#### (6) F (温泉ライター)

問題点として、次の3点がある。

- ①長期滞在したいと思える魅力が少ない（特に人との関わり）
- ②イベントやガイドなどは1泊を2泊にするフックにはなるが、長期滞在のフックにはならない
- ③宿泊料金、食事の内容&システム

長期滞在の一番の問題は、宿の主人や温泉街の人たち、宿泊者同士など、人と人との関わりが得られにくく

なっていることが問題なのではないかと思われる。

魅力ある人がいる場所には、自然と人が集まることになる。イベントとかガイドとかを用意する前に、宿の主人や女将さんたちが、個性を磨くというのも大切だと思う。ある山の温泉宿で、震災後毎年夏に1週間、滞在をしている夫婦に会った。夫婦の奥さんは、「この宿の女将さん（70～80代か）が本当にいい人で、早くに亡くなった自分のお母さんに似ている」ということで、毎年滞在しているとのこと。秋田県の山の湯宿では、30代の男性会社員が、「ここ来ると、色んな人に出会えて楽しい」と4泊の予定で泊まりに来ていた。山形県の肘折でも、1年に1回、同じ時期に同じ宿に滞在して、一緒に模型を作っている顔なじみのお客さんがいるとのこと。

こうした場を提供できる、個性なり、余裕なりが、宿泊施設側にも段々に少なくなってきたように思えてならない。かつて、宿泊施設側では、面白い宿のご主人がいたし、家族のように接してくれる女将もいた。仕事そっちのけで色々な場所に案内したり、例えば、半熟の卵が苦手と言え、ちゃんと固ゆで卵を作ってくれたりもしてした。「クレームがきてもイヤだし、お客さんとはつかず離れずの関係でいたい」といった片道的なもてなしの宿が多くなっているのは何とも残念である。一方で、「お金を出しているんだから」と言う客の態度にも問題があるように感じる。アンケートやクチコミなどに左右されてしまう現状では、個性を磨きにくくなっているのかも知れない。

そう言えば、以前に「死ぬまでに一度、富士山が見たい」と言っていた高齢の女将に会った。地方性のある人というのはとても魅力的だが、段々にそれも薄れていく。

宿泊料金は、長期滞在できるぐらいのお手頃料金であればと思うし、料理も同じ場所で食べると飽きてくるので、時には外食、時には別の宿、時には自炊など選べるようにできると良い。

#### (7) G (大学の研究者)

長期滞在客を増やすためには、自然・産業・歴史・文化といった多様な地域資源をうまく組み合わせる観光活用することである。つまり、好みの温泉地に滞在して、周辺の観光名所・施設等を日帰りで巡ることが出来るようにする。そのためには、隣接する自治体の観光関連の行政・団体・企業が、連携して多様な着地型旅行商品を造成すると共に、アクセス交通を改善することであると



考える。

#### (8) H (在野の研究者)

長期滞在はやはり、滞在型の観光商品の充実が必要である。青森県の場合、温泉県 (全国で温泉地数第 4 位) なので、湯治観光・健康観光・グリーンツーリズムなどに対して、①体験型・健康志向型の観光商品の充実、そして、それを県内くまなく散らばっている観光ツールとの組み合わせを行う、②観光コーディネータの育成、などが急務であろう。

青森県、北海道は 2016 年に北海道新幹線で海峡がつながり、日本列島が高速鉄道網でつながることとなる。その意味では海峡を挟んでの青森と函館の広域観光圏の構築・定着が、北国の観光シーンの大きな注目点であろう。

#### (9) I (温泉ライター)

ポイントは、その温泉地で「湯つくりできるかどうか」と思う。いい湯があり、その湯を囲むあたたかい人たちがいて、心癒される湯の風景や街並みがあり、地産の食とふりかけたくなるスポットやイベントがいつもそこにあることである。

中国地方で言えば、入浴、夕食後の夜神楽の鑑賞は温泉地の神社での開催が多く、好評である。また、岡山県の湯原温泉の事例で、アトピー性皮膚炎などで悩む人は外に出ずにひたすら部屋にこもって (食事はデリバリー) 治癒に努めるというケースがある。

本人が望むまで干渉は避けるが、体も心も治癒が進むと、今度は人恋しくなる。これは精神的なゆとりを回復したい人にもあてはまる。その時のためにも、もてなす環境が温泉地にはあると効果は大きい。外に出たい人、内にこもりたい人、それぞれ違っていても、温泉地に求めるニーズは、いつでも「湯つくりしたい」に違いない。

それと、金銭的にも時間的にも余裕が社会には確実になくなってきている。家族や友人との旅行を除き、2泊3日すらもう現実的ではない。長期滞在のテーマとは離れるが、あえて1泊2日や1・5泊や2日でミニ湯治 (湯ったり) が出来る環境を温泉地で進めることができないだろうか。また、観光客向けの発想よりも都会に出た娘や息子、その孫を迎え入れてあげるような感覚を温泉地全体で共有できればとも思われる。

そして、温泉地に長期滞在のアドバイスやフォローができる専任のディレクター役の人材がいてほしいと思わ

れる。

#### (10) G (温泉ライター)

問題点・課題として、次の 6 点を取り上げた。

- ①会社務めをしていると、まとまった長期休暇が取れない。
- ②長期休暇が取得出来たとしても、突発的な仕事が入り計画が立て辛い。
- ③宿泊施設での二食付きの長期割安プランが少ない。滞在地周辺の飲食施設の業種が偏っており、長期滞在の日替わりメニューの充実が必要。
- ④宿泊施設の長期滞在用の個室が少なく、一人利用の宿が限定される。
- ⑤宿泊施設の周辺には、長期滞在を飽きさせない施設・観光名所が少ない。
- ⑥療養型温泉地にあるような、日常生活に必要な施設が少ない。例えば、理髪店・コインランドリー・食料品店・マッサージ店・定食屋・ATM 等々。

### 3. まとめ

ここでは、上記の聞き取り調査 (含むアンケート) の結果をもとにして、今後の問題点と課題を整理して、この調査に指摘された問題点 (含む課題) について、次の 8 点で整理してみたい。(順不同)

#### (1) 滞在パターン

長期滞在をする場合、何かの活動をするのか、何もしないのか、に分類出来よう。前者はスポーツなど何らかの活動をするタイプ、後者は湯治・保養などが主体だが、その他では、野鳥観察・写真撮影など趣味の世界を堪能するケースがある。後者が本来の湯治場機能となるう。

前者の例として、和倉温泉 (石川県) などはスポーツ合宿を主体としたスポーツ観光に取り組んでいる。後者の例は、本来の湯治場の姿であって、鉄輪温泉 (別府市) では、入湯・地獄蒸料理の体験・路地裏散策・何もしないでのんびり過ごすなどがある。

#### (2) 滞在制度の充実

制度としては、休暇制度と社会保険制度がある。長期休暇は日本の社会制度上、なかなか実行に移されない。お盆・年末年始など、ある程度の長い休暇はあるが、これが温泉地滞在となると、費用が発生するので、特定の

層に限定されよう。

社会保険制度は、国の政策であり、なかなか進展が見込めない。小さな政府を目指す場合は、無理な政策であり、医師の診断があれば、温泉療養が保険で出来る制度化を望みたい。

各種制度が充実しても、最後は費用（旅行&滞在など）の問題が発生する。子育て世代・年金生活者として、生活に余裕はなく、割安の運賃制度、リーズナブルな宿泊施設の整備が課題となろう。

### (3) 着地型旅行商品の充実

温泉地で何をするか。1泊2日の場合は、宿泊施設の中の館内付帯施設の充実で良かったが、長期滞在となると難しい。温泉地での過ごし方のモデルを消費者に提示する必要がある。せめて4泊5日程度で、滞在モデルコースの旅行商品を関係者は提案すべきであろう。

### (4) ミニ湯治（新湯治）のススメ

現代人は何かと忙しい。長期滞在无理でも、せめて1・5泊とか2泊といった滞在パターンを商品化すべきである。その際は、温泉の魅力が第一義だが、地産地消・スローツーリズムを意識したミニ湯治が求められよう。

### (5) 専門のディレクターの確保

ホスト側で、専門のディレクター制度の充実を図りたい。現在、観光協会・旅館組合・宿泊施設などで対応しているが、出来れば、専門の事務所での対応が欲しい。滞在時のアドバイスが中心だが、入浴指導から観光案内に至るまで幅広い構成となる。

### (6) 環境の整備

温泉地における長期滞在となると、やはり温泉そのものの、そして温泉地自体の魅力が大切である。持続可能な温泉地を目指して、温泉資源を守りながら、魅力溢れる温泉地を整備し、残すことで、未来につなげたい。

そして、アプローチの問題も大きい。温泉津温泉では、JR温泉津駅から鉄道の到着時にミニバスを走らせており、湯治客や観光客の便利な足として機能してい

る。

環境としては、現行の国民保養温泉地が、温泉地として優れていると思われる。その価値は、現在、有名無実となるが、1954年から続く制度であり、指定92カ所の温泉地の有効活用を考えるべきだと思う。

### (7) 宿泊施設の充実

長期滞在の場合は、宿泊施設の充実が求められる。理想を言えば、高級ホテル・旅館からリーズナブルなゲストハウスに至るまで多様な形態の施設整備が求められよう。しかし、長期滞在の場合は、手頃な宿泊施設の充実が第一義で、旧来型の貸間旅館タイプではなく、素泊まりタイプ・キッチン付タイプなど、現代的（例えば、小奇麗な）宿泊形態の必要性を指摘している。

関連して、長期滞在に必要な飲食施設・買い物施設の整備なども希望が多かった。

### (8) 高齢者の健康生活

21世紀は、少子高齢化時代を迎えており、高齢者の健康・介護問題が山積しつつある。温泉地における長期滞在（主に療養・保養）は、高齢者が健康生活をすすめる上で、有意義な方途の1つと言えよう。

### 【付記】

本研究は、「研究種目（基盤研究C）、研究課題（温泉地における長期滞在モデルの構築に関する研究）代表者 内田彩 課題番号：26360085」による研究成果の一部である。

### 【謝辞】

面倒なアンケートや聞き取り調査に回答して頂き、誠にありがとうございました。一部の方で、長文でのメールコメントを頂きましたが、紙面の都合上、割愛しました。何かの機会に活用したいと思います。

### 【参考文献】

- 浦達雄（2006）『別府温泉郷の観光地域形成に関する研究』クリエイツ、218頁。  
 布山裕一（2009）『温泉観光の実証的研究』お茶の水書房、339頁。  
 服部銈二郎編著（2012）『現代日本の地域研究』古今書院、189頁。